【樹木の部屋】

クチナシ（アカネ科クチナシ属　Gardenia jasminoides ）

和名：クチナシ（梔子、巵子、支子）　　別名：ガーデニア

英名：common gardenia

リンドウ目　常緑低木　　原産地：日本、台湾、中国

花言葉：とてもしあわせです、喜びを運ぶ、洗練、優雅　　花色：白

← 写真-１　クチナシ
撮影日：2021 年 6 月 5 日
撮影場所：大和郡山市内にて
撮影者：M　さん

←↗ 写真-２，３　クチナシの花
撮影日：2021 年 6 月 5 日
撮影場所：大和郡山市内にて
撮影者：M　さん

← 写真-４　クチナシの葉
撮影日：2020 年 9 月 22 日
撮影場所：奈良市内にて
撮影者：Ｍ　さん

→ 写真-５　クチナシ(八重)の花
撮影日：2004 年 6 月 22 日
撮影場所：大和郡山市郊外にて
撮影者：Ｍ　さん

大和郡山市市街を抜ける県道沿いに咲いていました。ちょうど、花盛りで車の窓からも、綺麗に楽しめました。八重咲き種は郊外の住宅で咲いていました。クチナシは、八重咲きの栽培品種が多いそうですが、身の廻りでは、殆ど見かけた記憶はありません。

クチナシは、やや乾燥した丘陵地の照葉樹林内や林縁でみられる高さ 1～2m の常緑低木で株立ちします。葉は対生で、時に三輪生となり、長楕円形で全縁、皮質で表面に強い艶があります。葉身には、並行に並ぶ筋状の葉脈が目立ち、筒状の托葉を持ちます。また、枝先の芽は尖っています。

花期は春で、枝咲きに大型の白い花を咲かせ、花には強い芳香があります。開花当初は白色ですが、徐々に黄色がかるように変化します。萼、花冠の基部が筒状で、花冠はふつう 6 裂して平らに開きます。

秋ごろに、赤黄色の果実をつけます。果実は液果で、側面にはっきりした 5 ～7 本の稜が見られる長楕円形です。先端には 6 個の萼片が残り、開裂せず針状についています。多肉の果皮の中に 90～100 個ほどの種子が入っていて、形は卵形や広楕円形をしています。この果実は黄色の染料として利用され、また漢方では山梔子(さんしし)として用いられているそうですが、熟しても裂開しません。

庭木としてよく栽培されているクチナシは、大型の花で八重咲きのオオヤエクチナシ(別名ヤエクチナシ、英名ガーデニア)が多く、花は豪華ですが実はつけません。近縁種に樹高 30～40cm の低木で地表を這うように枝が横に広がるコクチナシや葉が丸いマルバクチナシなどがあります。

和名クチナシの語源には諸説あるそうです。果実が熟しても裂開しないため、口がない実の意味から「口無し」という説、上部に残る萼を口(クチ)、細かい種子のある

果実を梨(ナシ)とし、クチのある梨の意味とする説、他にはクチナワナシ(クチナワ＝ヘビ、ナシ＝果実のなる木)、よってヘビくらいしか食べない果実をつける木という意味からクチナシに変化したという説などがあるそうです。

奈良県天理市にある下池山古墳から出土した繊維片から、クチナシの色素成分が検出されるなど、日本における染色用色素としてのクチナシの利用は、遅くとも古墳時代に遡るそうです。乾燥果実の粉末は奈良時代から使われ、平安時代には十二単など衣装の染色で支子色と呼ばれています。現代でも無害の天然色素として、正月料理の栗金団をはじめ、料理の着色料としても使われているようです。大分県臼杵の郷土料理・黄飯や、静岡県藤枝の染飯(そめいい)も、色づけと香りづけにクチナシの実が利用されるそうです。また、木材の染料や、繊維を染める染料にも用いられるそうです。

オオスカシバの幼虫による食害があるので注意が非千代稟です。増殖は挿し木を利用します。